

17世紀イギリス詩人としての Mildmay Fane

高野 美千代

山梨県立女子短期大学国際教養科

Mildmay Fane: A Seventeenth-Century English Poet

TAKANO Michiyo

Department of International Studies, Yamanashi Women's Junior College

キーワード(Keywords) : ミルドメイ・フェイン(Mildmay Fane)、王党派詩人(Cavalier Poets)
17世紀イギリス(Seventeenth-Century England)、*Otia Sacra*

Abstract :

Otia Sacra (1648) is the only volume of poems Mildmay Fane, Earl of Westmorland published during his lifetime. He was a significant figure of his age as a royalist, and also he was a brother-in-law to Sir Thomas Fairfax. But he was not well known as a poet and his poems were not much discussed until very recently. This study aims to examine the peculiarities of Mildmay Fane's poems by comparing his work with that of other seventeenth-century English poets such as George Herbert, Robert Herrick, and Andrew Marvell. My paper also attempts to discover Fane's poetic inheritance from his predecessors and, more importantly, to his successors.

ウェストモアランド卿ミルドメイ・フェイン(Mildmay Fane, Earl of Westmorland, 1601-1666)の唯一の詩集*Otia Sacra*は1648年に出版された。発行部数が少なかったことも手伝ってか、特に注目を浴びなかった。フェインは主要な17世紀イギリス詩人に数えられたことはなく、むしろその存在は最近まで忘れられていたに等しい。1975年にファクシミリ版で*Otia Sacra*は出版されたが、マニュスクリプトで残存するその他500篇余の作品が一冊の本として纏められたのは21世紀になってからで、詩人の死後実に335年を経過してのことである。¹

政治家であり、伯爵であったフェインは、詩人としてではなくむしろ詩人のパトロンとして知られてきた。有力なロイヤリストとして国王に仕え、また裕福で理解のあるパトロンとして王党派詩人ロバート・ヘリック(Robert Herrick, 1591-1674)らと親交を持っていた。名門貴族に生まれ、恵まれた環境の中で様々なひとびとの出会いがあり、また、国会議員としてイギリス革命を体験した。国王チャールズI世を支援していたゆえに投獄され、追放生活を余儀なくされた時期もあった。この小論では、波乱に満ちた生涯を送ったフェインの詩集*Otia Sacra*の特性を取り上げ、歴史的・文化的背景を考慮しながら同時代の詩人との比較によりフェインの詩の意義を探りたい。

I . *Otia Sacra* と詩人の生涯

フェイン唯一の詩集には*Otia Sacra* (Sacred Leisure)というタイトルがついている。その題名通り、作品は「聖なる閑暇」、「敬虔な隠遁生活」を中心的テーマとしている。出版についてのエピソードはつぎの通りである。1648年、友人であるロバート・ヘリックが詩集*Hesperides*を発表したが、その中に“To the Right Honourable Mildmay, Earl of Westmorland”というソネットを収めている。そこで以下のようにフェインに対して詩集の出版を勧めた。

You are lord, an earl, nay more, a man,
 Who writes sweet numbers well as any can;
 If so, why then are not these verses hurled,
 Like sibyls' leaves, throughout the ample world?
 What is a jewel if it be not set
 Forth by a ring, or some rich carcanet?
 But being so, then the beholders cry,
 "See, see a gem as rare as Belus' eye!"
 Then public praise does run upon the stone
 For a most rich, a rare, a precious one.
 Expose your jewels then unto the view,
 That we may praise them, or themselves prize you.
 Virtue concealed (with Horace you'll confess)
 Differs not much from drowsy slothfulness.

ヘリックはパトロンの詩を宝石に喩え、どんなに素晴らしい輝きを持つ石でも人目にさらされなければその価値を知ってもらうことができない、と一庇護を受けていた関係からたびたび生じる過度の賛辞かもしれないが—フェインに詩集の出版を勧めた。このことによって、*Otia Sacra*の出版は実現したと考えられている。

全174ページの詩集*Otia Sacra*は2部構成で、前半には宗教詩、後半には世俗詩が収められている。第1部と第2部、それぞれの冒頭にはウィリアム・マーシャルによる版画の口絵がある。マーシャルはフランス・ベイコンの*The Advancement of Learning* (1640年版)の口絵をはじめ、ジョン・ダンの詩集(1635年版)やジョン・ミルトンの詩集(1645年版)における詩人の肖像で知られている芸術家で、のちにチャールズ1世の*Eikon Basilike* (1650年)の口絵も作成している。マーシャルのような当代きっての芸術家に詩集の版画を作らせていることから、宮廷人フェインの影響力がうかがえ、また自らの詩集に対して一種の誇りさえ感じられる。第1部の口絵には、中心に「信仰の柱」が立ち、柱は天に達し神のもとへと信仰者を導く。その礎にはウェルギリウスの『牧歌』(*The Eclogues*)から借用した題辞が“Deus nobis haec Otia fecit”と書かれ、平和な閑暇が神よりの賜物であることを宣言している。第2部の口絵はむしろ異教的で、当時の詩人が好んで言及した詩神の聖地の風景が描写されている。やはり『牧歌』よりの題辞があり、前半と同様に、自然の中の静寂を享受する詩人の姿を思わせる。後半部の世俗詩(と仮に呼ぶが)のテーマは恋愛ではなく田園での閑暇、隠遁生活—retirement—である。神秘主義的思想がその根底を流れ、作品中で詩人自身認めているように、後半部は前半部に付随するような内容になっている。²

田舎の静かな生活を詩人が切望した理由を考えると、伝記的要素を無視することはできない。³ フェインは1601年1月24日に生まれた。父親は初代ウェストモアランド卿で、母親はアンソニー・ミルドメイ卿の娘メアリといった。母親はノースハンプトンシャのアプソープ(Apethorpe)の地所を相続していたが、そこはのちにフェインが主邸宅とした館で、“My Happy Life, to a Friend”をはじめとする作品の舞台になっている。フェインがケンブリッジ大学エマニュエルカレッジに入学したのは1618あるいは1619年であり、1619年にはMAを取得している。また、その頃のケンブリッジ大学ではジョージ・ハーバート(George Herbert)が修辞学を指導していた。同じ頃フェインはトリニティ・ホールにいたヘリックとも知り合っている。さらに、詩人のフレッチャー兄弟(Phineas and Giles Fletcher)らとの出会いもあった。

大学を出たフェインは1620年ピーターバラ選出の国会議員として政治家の道を歩み始めた。だがまもなく議会在解散になるとフランス各地を旅して回った。この道程は自伝(*Vita Authoris*)によって詳しく辿ることができる。1622年に祖国へ戻ると、法曹学院のリンカーンズ・インに入学するが、今度はここで

エドワード・ベンローズ (Edward Benlowes) と出会っている。この詩人とは親交があり、彼には後にフェインから詩集 *Otia Sacra* を一部渡している。ベンローズは寓意詩(エンブレム)を好んで書いたが、その影響かフェインにもエンブレムへの関心がうかがえる。

1625年になるとフェインはケントから国会議員として政界に復帰する。その翌年の1626年に結婚しているが、相手はケントのウィリアム・ソーンハースト卿の娘でグレースといった。1629年、父親の逝去に伴いフェインはウエストモールランド伯爵の位に就いた。結婚後10年程して妻グレースに先立たれ、1638年には再婚の道を選んだ。相手のメアリ・ヴィアはタウンシェンド卿の未亡人で、父親はティルベリのヴィア卿だった。メアリの妹アンはトマス・フェアファクス卿の妻であったので、この結婚によりフェインは議会派司令長官のフェアファクスと義兄弟になったことになる。また、この縁でフェインは当時フェアファクス家に仕えていた詩人アンドリュー・マーヴェルともおそらく出会っている。

1642年、ノースハンプトンシャーにいたフェインは国王の命により兵士を召集することになった。議会は実行を阻み、フェインをロンドン塔に投獄した。翌年まで実に一年以上の歳月をフェインは獄中で過ごした。結局2000ポンドの罰金と領地の没収で解放されたが、ロンドンから5マイルの範囲内の移動のみが許可された。1644年議会に盟約を提出し、領地を取り戻すことができた。この直後、フェインはカントリーハウスポエムを含め隠遁生活(リタイアメント)、閑居の美德をうたう詩の多くを書いたのである。王政復古後、1660年に再び政治生活に戻り余生を送った。マニュスクリプトから、詩作は晩年まで続けられたことがうかがえる。

Ⅱ. 宗教詩——ハーバートとの類似と独自性について

フェインは宗教的には保守的な長老派と厳格なカルヴィニストの清教徒両方に縁があった。だが作品からすると彼はアングリカンで、*Otia Sacra* の冒頭は特にジョージ・ハーバートの *The Temple* との類似性を呈する。

ケンブリッジ大学では修辞学の教師と学生という立場で出会っているハーバートとフェインであるが、ハーバートの影響はフェインの宗教詩に多く見られる。敬虔なアングリカンであったハーバートは詩集 *The Temple* において、飾らずに素朴な言葉で神を賛美することを宣言し、たとえば当時ジョン・ダンなどによって多用されていた難解なメタファーの使用を拒んだ。教会、礼拝、聖書から十分に題材を得て、ごく平凡な信徒の心の弱さ、それを包み込む神の愛を読み手に伝えることに成功した。しかし彼が詩の形式に凝らなかったとは言えず、韻律は大変バラエティーに富み、形象詩も書いている。視覚的效果を狙ったヒエログリフの代表例としては、“The Altar” と “Easter-Wings” を挙げることができる。各詩行の長さを工夫して祭壇の形にあるいは鳥の飛翔を表す形に整えた作品である。フェインの作品で、Fulbeck Hall MS 2の “Vita Humana quid?” には、その詩形において、“Easter-Wings” の影響が垣間見られよう。フェインはカブレットで書くことが主で、*Otia Sacra* の宗教詩では詩行の長さも律格も様々である。また、フェインは絵とラテン語を組み合わせたエンブレムを好んでいる。

1593年生まれ of ハーバートはフェインよりも8歳年長であった。イギリスが見事な繁栄をとげたエリザベス朝から、英国国教会が最も安定したジェイムズI世朝に短い生涯の大半を過ごしている。1633年に没した詩人は、イギリス革命も英国国教会の衰退も知ることはなかった。名門貴族の生まれで、ケンブリッジでの学生時代からエリートの道を着実に歩んでいた。大学代表弁士(public orator)も務めた。国会議員にも選出されたが、のちに聖職者の道を選び、ソールズベリー近くのベマトンという寒村の司祭となった。英国国教会に属し、教会、礼拝、聖書などから詩の題材を得てはいるものの、作品は宗派を超えた信仰者の心を普遍的に描いている。詩集 *The Temple* は彼の没後まもなく1633年に出版され、その後、1641年、革命中の1647年、共和制下1656年にリプリントされている。イギリス史上おそらく最も激しい動乱期に、この詩集がいかに多くの人々の心を支えていたかは想像に余りある。チャールズI世さえもハーバートの読者の一人であったので、フェインが *The Temple* を読んでいたことは間違いないだろう。

Otia Sacra の第1部(宗教詩)ではハーバートの影響を否定できない。教会の儀式のひとつである聖餐

をテーマにした作品を例に挙げてみよう。ハーバートの“Love (Ⅲ)”は大変有名な作品であるが、イエス・キリスト(Love)を「主人」、語り手である自分を「客」という立場に設定し、どんなに罪で汚れた者であっても、キリストは赦し受け入れてくれるということを物語風に伝えている。主人は客に食事をとらせるが、それが聖餐を意味することは言うまでもない。フェインの“A Hymn occasioned upon going to receive the blessed Sacrament when it was a snow.”は以下のように始まる。

Invited now to Sup with Thee my Lord,
 All that I am is at a Period
 How to be fitly drest,
 And so t'become a worthy Guest;
 For 'tis prepar'd alone
 For such as have the Wedding garment on,
 Which through Guilt I want,
 And all my Substance t'buy one is too scant.

主人から夕食に招かれた客が、その席にふさわしくない自分の身なりのみすぼらしさを恥じているところである。明らかに“Love (Ⅲ)”と設定が重なる。会話形式にはなっておらず、作品自体の長さもかなり異なっているものの、内容的には明らかな類似がある。罪に陥りやすい人間の本性を否定せず、しかしながら、自らの罪深さに気後れしたとしても、聖餐に与ることこそが信仰の表現であるというのが作品の主意である。ハーバートの設定を借りて、冒頭ではためらいを見せる信仰者だが、最後のカブレットでは“My forehead bear thy stamp / As servant, having Oyl still in my Lamp.”と、より明確な形で信仰を宣言するという展開になっている。

同じく設定を借用していると想定できるものとして、1647年に書かれたキリストの贖罪をテーマとする“My Countrey Audit”が挙げられる。これは、ハーバートの“Redemption”に似ているが、そこではキリストを寛大な領主、詩人をその小作人という関係に喩えたものになっている。フェインの場合、キリストの父である神を領主に、自分を小作人に置き換えている。実際の生活でフェイン自身は領主であったため、土地を貸す者と借りる者との関係を熟知していたには違いない。冒頭では静寂の中で過去に犯した罪を振り返る姿が描かれる。

Blest Privacie, Happy Retreat, wherein
 I may cast up my Reck'nings, Audit Sin,
 Count o'r my Debts, and how Arrears increase
 In Natures book, towards the God of Peace:

作品では多くの罪を犯してきた語り手を、小作料の精算を延期してもらっていて支払いがなかなか出来ない小作人に重ね合わせている。借金の帳消しをしてくれる寛大な領主は、すなわち詩人の犯してきた罪をすべて赦す神である。

So here, methinks, I see the Landlords Grace
 Full of Compassion to my drooping Case,
 Bidding me be of comfort, and not griev'd,
 My Rent his Son should pay if I believ'd.

ハーバートの“Redemption”同様に、その御子イエスの贖罪によって信徒の心の平安が約束される。フェインは頻繁にキリストの受難、贖罪、復活に触れ、宗教詩のイメージを主に聖書と教会の儀式か

ら得ている。己の罪深さに苦悩する信徒の姿を描くところはダンやハーバートといった英国国教会がおそらく絶世期であった頃のアングリカン詩人と相通ずる点である。⁴ 革命のために投獄され、後に隠遁生活を余儀なくされた詩人は Aphorpe で閑居する中、自らの霊的葛藤を詩作にぶつけたのであろう。

Ⅲ．田園詩——カントリーハウス、ジョージック、リタイアメントについて

Otia Sacra は宗教詩と世俗詩の2部に分かれているが、世俗詩の中にはさらに2つのグループの作品がある。カントリーハウスポエムとリタイアメントポエムである。⁵

イギリスのカントリーハウスポエムの第一人者ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) はスチュアート朝きつての王党派詩人であった。宮廷仮面劇、(一般劇場用の) 劇、また多くの詩の作者である。フェインのような貴族の生まれではないが、作家としては最も国王に近い存在であった。そんなジョンソンの詩集をフェインは自宅のライブラリーに置いていた。⁶ ジョンソンは後世の詩人に大変な影響を与えたが、それがいわゆる「ベンの子供たち」という王党派詩人群であるのは言うまでもない。フェインはそのグループにこそ属さないが、ジョンソンの著作を通して学ぶことは少なくなかっただろう。

ジョンソンのカントリーハウスポエムは、理想化された領主の館とそれを取り巻く田舎の生活を描く。ジャンルを代表する作品である「ペンズハースト屋敷に捧ぐ」(“To Penshurst”)、もう一編のカントリーハウスポエム「ロバート・ロス卿へ」(“To Sir Robert Wroth”)は、共に神話と古典への言及に満ちている。また、レシピエンツへの賛辞がふんだんに盛り込まれることも共通している。ローマ詩人を模倣して都市の生活を否定しながら田舎の生活を賛美するやり方で、欲望に満ちた宮廷生活の墮落と自己充足的な田舎の生活を対比させる。ペンズハーストの主人は詩人のパトロンであり友人でもあるサー・ロバート・シドニーであった。一方、ロバート・ロスという人物はサー・ロバート・シドニーの娘婿にあたる。共に名門貴族シドニーファミリーに属し、立派な領地を所有していた。領地の豊穡は賞賛するに恰好の材料といえる。詩人はまず土地の肥沃さを称え、その流れで屋敷や庭など領地の様子を書き記す。領主によるホスピタリティも不可欠なトピックのひとつと言えよう。ジョンソン以後、様々な詩人が同じように田舎の魅力を強調した。フェインの詩集 *Otia Sacra* に収められたカントリーハウスポエム “To Sir John Wentworth, upon His Curiosities and Courteous entertainment at Summerly in LOVINGLAND” は彼の友人であるウェントワース卿に宛てられている。フェインと同様やはりMPであったウェントワースは、サフォークに “Somerleyton” という領地を持っていた。“Summerly” はその俗称という。革命期にはウェントワース自身が議会派によって身柄を拘束されたり領地へはオリヴァー・クロムウェルが軍隊を伴って来たりと様々な苦難にさらされた。1640年代前半のことである。作品の執筆時期は定かではない。*Otia Sacra* 出版の1648年以前ということだけは確かだが、とにかく詩人が屋敷を訪れた記念に書かれたものであろう。宗教詩とは違って作品は異教的なイメージに満ちている。全114行の詩であるが、その冒頭から領地が世界中の何処にも劣らない美を誇る場所として描かれている。

Now as contracted vertue doth excell
In power and force, This seems a Miracle;
Wherein all Travailers may truly say,
They never saw so much in little way:
And thence conclude their folly, that did steer
To seek for that abroad, at home was neer
In more perfection: (II 15-21)

また、作品の中ほどではジョンソンがペンズハースト屋敷について書いたのと同様に、water・fire・air・earthの四元素に触れながら領地の豊穡を示唆している。四元素への言及は中世からの伝統とも言えるが、その一方で、フェインは庭に置かれた異教の神々の彫像、多様に作られた “walks” と呼ばれ

る散歩のための小径、来客を驚かせかつ楽しませるねらいをもって庭で奏でられる音楽など当時の新奇な要素にも言及している。これらは明らかに17世紀中期の貴族趣味を表すものと言える。すなわち、アラステア・ファウラーが指摘するように、ジャンルとしてのカントリーハウスポエムにとっては新たな段階—middle phase—の特徴を示していることで意義深いと言えよう。⁷

ロバート・ヘリックによるカントリーハウスポエムの中にフェインに宛てたものがある。“The Hock-Cart, or Harvest Home: To the Right Honourable Mildmay, Earl of Westmorland”はフェインの好んだ屋敷があるアプソープを舞台としている。領主フェインと詩人ヘリックが一年の農作業の終了を祝う行事“Harvest Home”を農夫らと共に繰り広げる。領主とは言えフェインのような高貴な生まれの人物が、農夫の労働に関心を持ち、農業の暦にそった祝い事を共にすることは実際には少し考えにくい。ただ、この作品の意義は、事実であるかという点よりもむしろジョージックのテーマを扱っているということにある。

ルネサンスを迎えたイギリスにおいて、ウェルギリウスが人気を博した古典作家のひとりであったことは言うまでもない。エピックの『アエネーイス』、パストラルの『牧歌』そのどちらもイギリス文学に多大な影響を及ぼしている。たびたび模倣され、言及されるそれら2作品と比べれば、ジョージックの『農耕詩』は取り上げられることが少ない。ウェルギリウスの『農耕詩』はそもそも教育的な意味を持っていた。農業を復興させ、荒廃する農村を、延いては国家を建て直そうという意図により、当時のパトロンであるマエケナスに勧められ、紀元前36年頃から詩人は執筆を始めた。内容としては、実際の農業のノウハウではなく、むしろ農村の魅力を訴えるものになっている。⁸

フェインのマニュスクリプトに残された作品“My Hock-Cart or Reaping Day”において、彼はヘリック同様に収穫の祝いの光景を描写している。執筆は1647年8月28日とマニュスクリプトに記されていて、前述のヘリックの作品と同時期に書かれたものかもしれない。領主として、実際に土にまみれた作業に手を貸しはしないが、フェインの目は農夫、農具、作物に向けられ、労働を終えた農夫らが飲食を楽しむ祝いの席をほほえましく見つめる。

Ⅳ．リタイアメントポエム

フェインは「リタイアメントについて書いた最初のイギリス詩人」⁹であり、自然の中、その静寂の中で神の御業である被造物を観察し、瞑想する隠遁生活について書いている。“To Retiredness”はフェインのリタイアメントポエムであり、*Otia Sacra*の中で最も有名な作品でもある。この作品はマーヴェルの“The Garden”や“Upon Appleton House”などと、時に同様の響きがある。事実、詩人としてのフェインが注目されるのはマーヴェルとの関連によるといっても差し支えなからう。¹⁰

1638年、2度目の結婚でフェインはトマス・フェアファクス卿と義兄弟になった。フェアファクスはチャールズI世の処刑を前に議会軍司令長官の職を辞し、イングランド北部ナンアプルトンにアプルトンハウスに隠居した。詩人アンドリュー・マーヴェルはそこでフェアファクスの娘メアリの家庭教師をしていた。マーヴェルはヨーロッパ大陸で語学を学び、帰国したばかりの若者であった。当時の思想・信条は明らかではないが、後にはピューリタンの政治家として大いに活躍した人物である。アプルトンハウスに住んでいた1651年から1653年頃、彼は生涯におけるほとんどの詩作をした。1648年に出版され、フェアファクス家にも一部贈られた*Otia Sacra*を、マーヴェルはその頃手にとっていたかもしれない。

リタイアメントポエムの特徴というのは、第一に世俗的快楽を拒絶することにある。ホラティウスの『エポード』第2歌のテーマ同様に、富や名誉は人間の心からむしろ平安を奪うものであり、現世的欲望の渦巻く都会から離れたところに真の幸福があると示唆する。そして静寂の中、神の御業である自然を観察し瞑想する生活の喜びを描いているのがまた大きな特徴といえる。全8連80行からなる作品の終わりの2連は以下のように書かれている。

Thus out of fears, or noise of Warr,
 Crowds, and the clamourings at Barr;
 The Merchant's dread, th'unconstant tides,
 With all Vexation besides;
 I hugg my Quiet, and alone
 Take thee for my Companion,
 And deem in doing so, I've all
 I can True Conversation call.
 For so my Thoughts by this retreat
 Grow stronger, like contracted heat.

Whether on Natures Book I muse,
 Or else some other writes on't, use
 To spend the time in, every line,
 Is not excentrick but Divine.
 And though all others downward tend,
 These look to heaven, and ascend
 From whence they came; where pointed hie,
 They ravish into Mysterie,
 To see the footsteps here are trod
 Of mercy by a Gracious God.

一見してマーヴェルの “The Garden” との類似が読み取れるが、フェインの “To Retiredness” でも「静寂」は擬人化され、詩人の大切な友となっている。そして詩人は「被造物の本(Book of Nature)」を通して神の痕跡を地上の世界に認める。作品のトーンは全体的には神秘主義的であり、世俗詩とは言え宗教詩にほど近い内容となっている。

V. むすび——フェインの位置と意義

17世紀のイギリスに生きたフェインは、国王チャールズI世と親しい間柄にあり、議会軍の反乱に圧迫され、投獄され、やっと解放されて地方領地における閑居を享受する中、国王の処刑という、きわめて衝撃的な事件を目の当たりにした。この複雑な経験があったからこそ静寂な瞑想の美德を記すリタイアメントのテーマを詩人は追及したのではないだろうか。

詩人としてのフェインを考えると、その存在における意義は大きく2つある。ひとつは、17世紀中期の新しい貴族趣味を書き記したことにより、カントリーハウスポエムの新たな時代を築いたことと言える。また、作品の公開がなされなかったため長いこと取り沙汰されてはこなかったが、ヘリックの陰に隠れてジョージックを、マーヴェルの陰に隠れてリタイアメントのテーマを、同時代そして後世の詩人たちに伝えたことにフェインの価値があるのではないだろうか。ミルドメイ・フェインの作品についての評価はいまだ定まっていない。これは彼の作品の大部分が300年以上マニユスクリプトの形にとどまっていたからと言えよう。ようやく今、そしてこれから本当の意味で「宝石を人の目にさらす」ことになったのである。

- 1 ファクシミリ版は Mildmay Fane, Second Earl of Westmorland *Otia Sacra* (1648) (Delmar, New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1975)、マニエスクリプトを纏めた詩集は *The Poetry of Mildmay Fane, Second Earl of Westmorland* ed. Tom Cain (Manchester: Manchester UP, 2001)。なお、この小論におけるテキストの引用は *Otia Sacra* は前者(ファクシミリ版)、その他は後者からとする。
- 2 第2部最初の作品 “Humane Science Handmaid to Divine. Famulentur Prioribus” にはその旨が全体を通して書かれている。
- 3 詩人の伝記的情報については Tom Cain のエディションに収められたフェインの自伝 *Vita Authoris*、ファクシミリ版 *Otia Sacra* 冒頭の Donald Friedman による “Introduction”、および Gerald W. Morton *A Biography of Mildmay Fane, Second Earl of Westmorland 1601-1666: The Unknown Cavalier* (Lewiston / Queenston / Lampeter: The Edwin Mellen Press, 1991) 参照。
- 4 神を人間の恋人のように喩えるなどフェインの作品には時折ダンと共通するイメージも使われている。ただし語り口の違いからかダンのような強烈な印象、力強さには欠ける。
- 5 Alastair Fowler はフェインによる11篇の作品をカントリーハウスポエムとみなしている。*Otia Sacra* に収められているのはそのうち “My Happy Life, to a Friend”, “To Retiredness”, “A happy Life”, “To Sir John Wentworth”, “Occasioned by Seeing a Walk of Bay-Trees” の5篇である。*The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth-Century Estate Poems and Related Items* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1994) 参照。Fowler はジャンルを拡大して解釈し、リタイアメントをカントリーハウスポエムのトピックのひとつに含めている。ただしこの小論ではリタイアメントポエムはカントリーハウスポエム本来のトピックである領主の生活や領地経営、ホスピタリティーなどに触れていないことから別の項で考察する。
- 6 ジョンソンの没後には哀悼の詩 “In Obitu Ben. Johns. Poetae eximii” を書いている。
- 7 Alastair Fowler, *The Country House Poem*, pp. 20-21. Fowler はフェインをジャンルの中期詩人として第一に挙げている。
- 8 ウェルギリウスの生涯、『農耕詩』執筆の事情などについては河津千代訳 ウェルギリウス『牧歌・農耕詩』(未来社、1994年)、pp. 9-35 参照。
- 9 Maren-Sofie Rostvig, *The Happy Man: Studies in the Metamorphoses of a Classical Ideal 1600-1700* (Oslo: Norwegian Universities Press, 1962), p. 133.
- 10 M. C. Bradbrook, “Marvell and the Poetry of Rural Solitude”, *RES*, XVII (1941), 37-46 参照。